



## FEMS2019報告

吉田 健一

FEMS2019(8th Congress of European Microbiologists: 第8回欧州微生物学会連合総会)は、2019年7月7-11日に英国スコットランドのグラスゴーにて開催された。本会議はFEMS (Federation of European Microbiological Societies: 欧州微生物学会連合)が主体となり、FEMSに参画しているSfAM (Society for Applied Microbiology: 応用微生物学会)との共同事業として、総数約2,000名の参加者を集め成功を取めた。筆者は、本年より3年間の任期にてFEMSアンバサダーに任ぜられたこともあり(後述)、このFEMS2019へ参加する機会を得たので、本会議開催の背景、そしてその内容と印象を報告する。

### FEMSとは何か

**FEMSの歴史** FEMSは、1968年に発足したその前身たるNWEMG (North-West European Microbiology Group)を基盤として成長してきた学会連合である。現在では38か国に所在する微生物学研究に関連する53の学会団体、総数30,000人に上る研究者の参画を得て欧州を中心とする国際的組織を形成するに至る。その歴史の詳細記録については“The Federation of European Microbiological Societies: An Historical Review”を参照されたい<sup>1)</sup>。

**FEMSの活動** FEMSは科学の卓越性と多様性を促進し、微生物学を取り巻く今日の社会問題を解決するために、研究資金の提供、ジャーナルの刊行、微生物学者の連携、他組織との提携などを実現する活動を進めている。特に、5種のFEMSジャーナル(FEMS Microbiology Ecology, FEMS Microbiology Letters, FEMS Microbiology Reviews, FEMS Yeast Research, そしてPathogens and Disease)<sup>2)</sup>の刊行は主たる収益源であり、FEMS2019のような大型イベントのみならず、大小さまざまな会議・ワークショップの開催を支援する他、各種奨学金や研究

助成金、授賞などを提供すること、また、参画の学会団体に課される会費を低減することを可能にしている。FEMS総会は欧州圏内で開催地を移動しながら隔年周期で開催されてきたが、FEMS2019にてその第8回目を数える。

**FEMSアンバサダー** FEMSでは2019年より日本、中国、韓国、そして米国にFEMSアンバサダーを配置して、積極的に国際ネットワーク構築を開始した。FEMSアンバサダーは、FEMSの使命、ビジョン、活動を国際的に普及するため、各自が担当する非欧州地域の微生物学研究者およびコミュニティへFEMSの活動への協力と参加を働きかける。筆者は、仏国留学の経験と欧州研究者ネットワークに明るいことを認められ、日本人として初めてこの任務を担当することになった。FEMS2019は、その任命式を兼ねており(図1)、FEMS執行部と面会して意見を交換する好機となった。以降は少なくとも年に2度、国内の微生物学関連学会などにてFEMSに関する情報を告知すること、そして定期的な活動報告を求められる。また、他のアンバサダーとの連携やFEMSへの情報フィードバックを行うことについての貢献も期待されている。

### FEMS2019

**開催地グラスゴー** グラスゴーは、スコットランド南西部のクライド川沿いに位置する、全英第4位、スコットランドでは第1位の人口を有す都市である。今回、筆者はイングランド北東岸にあるニューカッスル大での講演や研究打合せの後に、陸路現地入りした。ローマ帝国が建設したハドリアヌス長城の遺跡(イングランドとスコットランドの国境にほぼ一致する)に沿い西岸のカーライルまでグレートブリテン島を東西に横断し、次いでスコットランドを北上してグラスゴーへ至る間、車窓に広がる長閑な田園風景を楽しんだ。



図1. FEMSアンバサダー任命式の様子。中央はFEMSプレジデントのOudega博士。筆者は右から2番目。



図2. FEMS2019会議場のSECセンター付近<sup>3)</sup>

著者紹介 神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科(教授), FEMS Ambassador E-mail: kenyoshi@kobe-u.ac.jp



図3. FEMS2019開会式のバグパイプ演奏の様子

会議場は、クライド川港湾地区の中心に貝殻を思わせる印象的なデザインのSECセンターであった(図2)。会場の近くには巨大なフィニストン・クレーンが保存され、かつて全世界総造船数の1/5を担った繁栄の記憶を残す(クイーン・エリザベス2号はここで建造された)。幕末に伊藤博文らと英国へ密行留学した若き山尾庸三は、この地で造船と工業を学び「いつかは日本も」と誓ったという。

**FEMS2019の内容と印象** 開会式は7月7日の午後、2人のバグパイプ奏者の演奏により開始された(図3)。FEMS2019は、欧州各国のみならず、非欧州地域からも多数参加がある世界規模の会議となり、日本からの参加総数は100名余であった。この参加者数は歴代でも最多となるが、日本の研究者人口と研究活性からすると、もっと多くの参加があってもおかしくないのだがという意見もあった。特に若手研究者には是非とも積極的な参加を願いたい。開会式に先立っては、学生参加者より選出された旅費奨学金受給者との昼食懇談会が開催され、筆者もこれに招待された。日本人の旅費奨学金受給者が3名いたことは喜ばしい。

FEMS2019のメインテーマは、コミュニティの構築であった。コミュニティ形成は微生物学の発展基盤であるという認識を共有し、研究プロジェクトを主導するレベルでも、未だキャリアを模索しているレベルでも、参加者による自発的コミュニティの形成を積極的に支援する姿勢が強調された。その一環として、ポスター会場では女性研究者、LGBT研究者、アフリカ地域研究者等々、少数派コミュニティの支援を目的として、パネリストを囲んで飲み物を片手に議論する企画が毎夕設けられた。

学術的话题については、抗菌剤耐性、環境汚染、新たな感染症の出現など、今日の世界的な課題に対処するための最新の研究動向を中心に、幅広く多様なテーマが選定され、8会場に分かれて研究発表講演が行われた。特に、“Building Microbial Communities”と題して、微生物が構成するコミュニティに関する研究成果について15の学術雑誌から22の最新論文が選ばれてFEMS2019の特集として発表され、微生物のコミュニティ形成とそ



図4. FEMS2019参加者集合写真

の機能に注目する新たな研究潮流の勃興を印象付けた。「インフルエンザの本当とウソ」という一般公開イベントもあり、市井の人々と第一線研究者を交えるコミュニティの形成が試みられたことは注目に値する。

ところで、このように大規模な会議イベントでは毎回問題となることだが、会議場があまりに広いため、いつどこで何が行われているのかを把握するのは容易ではない。加えて、SECセンターは建物そのものの構造が複雑で、筆者は時に道に迷ってしまうこともあった。しかし、Twitter、Facebook、Instagramなどのソーシャルメディアを通じて情報が随時発信されており、モバイルアプリを入手して議題整理、メモ作成、発表要旨確認、会場地図の確認、他の参加者への連絡、質問の投稿等々が可能となるなど、利便が図られていたことは助けとなった。

最終日には学会賞や優秀発表の授賞式が行われたが、それに先立つ前夜は市街中心部に場所を移して晩餐会が開催された。体育館のように広い吹き抜けの屋内に複数のさまざまな料理を提供するレストラン群が中央の広い空間を囲むように配置されており、乾杯を終えた参加者は好みの席に陣取り食事をとった。次いで、バグパイプを交えたバンドが演奏を始めると、欧州の国際会議では恒例のことであるが、中央のフロアで多くの参加者がダンスに興じていた。残念ながらダンスについてはまったくの門外漢であるため、筆者がこれに参加することはなかったが、これもある意味で重要なコミュニティ活動であるかと感慨深く雰囲気を楽しんだ。

次回のFEMS総会は2年後の2021年7月11-15日に、ドイツのハンブルクで開催される。筆者は、多くの研究者仲間と再会を約束してグラスゴーを後にした。上述の通り、次回は日本からの参加者がさらに増加することを期待したい。最後に、参加者有志にて会場前で撮影した集合記念写真(図4)を掲げて本稿を閉じるとする。

## 文 献

- 1) Dawes, E. A.: *FEMS Microbiol. Lett.*, **100**, 15 (1992).
- 2) FEMS journals: <https://fems-microbiology.org/fems-activities/journals/> (2019/8/22).
- 3) FEMS2019 abstract book: <https://fems2019.org/abstracts/abstract-book/> (2019/8/22).

